

ドボクに萌える

2

ダムに萌える



宮島 咲 MIYAJIMA Saki

ダムマニア&ダムライター

ダムマニアとして活動している人々がいる。なぜ彼らはダムに萌えるのか。ダムマニアから見る“萌える”ポイントやダムの楽しみ方、ダムへの想いとはなにか。そして、さらに深くダムの魅力に填ってゆく理由を熱く語る。

山間部にドライブに行くと、道中でダムを見かけることがある。ダムは日本各地に点在し、その数はおおよそ2,900。単純計算で、各都道府県に61基あるという計算になる。また、ダムはダムでも、砂防ダムと呼ばれる土砂を貯めるダムや、鉾津ダムと呼ばれる廃棄物を貯めるダムなどもあり、これらのダムはこの数に含まれていない。さらに、ダムによく似ている堰というものもある。堰は高さ15m未満のものを指し、ダムと堰は高さによって分類されている。これらを合わせると、日本には1万基以上のダムが存在することになる。

こんなダムたちを熱いまなざしで見てまわる者がいる。「ダム愛好家」「ダムマニア」「ダムクラスタ」などと呼ばれる人々だ。彼らはダムの魅力にとりつかれ、週末の度にダムへと足を向ける。彼らを夢中にさせるダムの魅力とはいったい何なのか。

視覚的刺激

行ってみると分かるが、ダムは巨大である。遠くにあるのに巨大に見えるダムは、近づけば近づくほどその大きさを増し、視界に入りきらないほどになる。下からダムを見上げると、巨大なコンクリートの塊という言葉しか出てこない。高さは100mを優に超え、間近で堤頂部を眺めると首が折れ曲がりそうになるほどの高さだ。そして、このコンクリートの向こうには何億tの水がある。こう考えると人間とは恐ろしいものである。この様な巨大構造物を山奥によく造り上げたものだと感心してしまう。

人間は巨大なものを見ると無条件に感動を覚える。巨大な建造物、たとえば、超高層ビルや東京スカイツリー、奈良の大仏などを見て何かしら感動を覚えるだろう。大きなものに接したという非日常感から来る感動だ。ダム見学も同じで、日頃体験すること



写真1 石を積み重ねて造られたダム。南相木ダムは日本一白いダムとして有名(長野県・東京電力)



写真2 高さ156mの宮ヶ瀬ダム。間近でダムを見ることができる(神奈川県・国土交通省)



写真3 川幅いっぱいにゲートが設置されている鹿瀬ダム(新潟県・東北電力)

ができない巨大さや高さなどの非日常感を体験することができる。これを味わうため、ダム愛好家はダム巡りを繰り返すのである。

一つとして同じ顔はない

複数のダムを見ると分かるが、ダムには一つとして同じデザインをしたものはない。建設場所や河川の流量、目的の違いなどを理由に、一つとして同じ形のものはないのだ。

流量が多い河川のダムは、放流設備であるゲートが多数設置されているが、流量が少ない河川のダムには一つか二つしかゲートは設置されていない。さらに、複数の目的を持ったダムの場合、きめ細やかな放流制御が求められるためゲートの設置位置が様々で、ダムの堤頂部はもちろんのこと、ダムの下部にもゲートが設置されている。逆に単目的のダムの場合、それほど細かく放流量を制御する必要がないため、ゲートが堤頂部だけにしかない場合が多い。

堤高と呼ばれるダムの高さもまちまちで、平地に近いダムはそれほど高さはないが、山間部に行くにしたがって堤高の高いダムが多く現れる。また、建設場所の地盤強度により、ダムの形そのものも変化する。強固な地盤の上には、きれいな曲線で構成されたアーチ式コンクリートダムが、やや軟弱な地盤にはロックフィルダムが建設されている。

ダムの管理機関によってもダムの個性が出る。ダムは国土交通省や都道府県などの地方自治体、東京電力などの電力会社が多く所有している。これらの管理機関による個性の違いを見いだすのも面白い。たとえば、中部電力が所有するダムの場合、ゲートの色が赤である場合が多い。また、関西電力が所有するダムの場合、ゲートの色が黒である場合が多い。ダム愛好家はこれらをそれぞれ「中電レッド」「関電ブ

ラック」と呼んでいる。

ダムのデザインにも違いがあり、農林水産省のダムは地味で飾りっ気が無いダムが多い。逆に、水資源機構のダムは遊び心があり、各所にダム特有の個性あるデザインが施されていたりする。無駄がないデザインをしているのは電力会社のダムだ。電力会社は民間企業であるためコスト意識が高い。そのため、ダムに余計なデザインを施すことはほとんどせず、さらには管理用の設備までも最低限にとどめているといった具合である。

ダム愛好家はこれらのダムの個性を見だし、違いを楽しんでいる。ゲートの色や数、型式や堤高などからダムを識別できるようになるのである。人は物の識別ができるようになると知識的な楽しさを感じる。野に咲く花を見て、ヒマワリとタンポポの違いが分かれば楽しいだろう。釣りをしていて、カレイとヒラメの区別がつけば楽しいことだろう。ダム愛好家は、これをダムで実践しているのだ。

制覇欲

ダムで非日常を感じ、その個性を識別できるようになると、より多くのダムへ訪問したくなるのは当然の流れだろう。まだ見たことのないダムは、どの様な格好をしているのかなどと気になってくる。最初は家から近いダムへの訪問のみだったが、そのうちに、自分が住んでいる都道府県以外のダムにも行ってみたいとなる。そう、エリアを定めて制覇したくなるのだ。最初でも触れたとおり、都道府県には平均して61基のダムがある。この数字は制覇するには適当な数で、制覇欲を損なわない数であり、しかも制覇可能と思わせる数である。こうして近隣のダムへ毎週のように出かけるようになってゆくのである。そして、自分が住む自治体のダムを制覇すると、次には自分が住む地方のダムを制覇してみたいとなる。これを繰り返し、やがては東日本のダム、日本全国のダムと、レベルを上げてゆくのである。

しかしながら、ダム訪問を繰り返してゆくと、最初は楽しかったダム巡りもやがては義務化してくる。誰かに強制されてダム巡りをしているわけではないのだが、自分に課した制覇ノルマにより、ダム巡りをさせられているという感覚を持ってしまうのである。まるで、四国の八十八ヶ所巡りをしているようだ。辛いのにはやめない。制覇できたら明るい未来が待っているかの様な錯覚におちいる。それでもダム巡りを続けるダム愛好家は存在する。自分よりも多くダムを制覇している者の存在や、ダムの数が背中を後押しす



写真4 クレスト部にゲートを1門しか持たない加治川治水ダム(新潟県・新潟県)



写真5 中電レッドと呼ばれる赤いゲートを持つ久瀬ダム(岐阜県・中部電力)

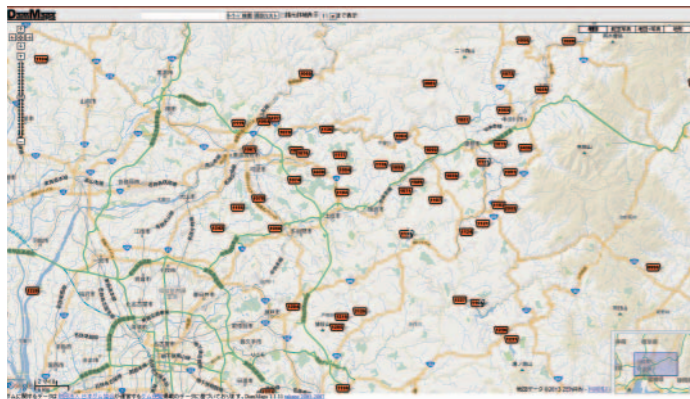


図1 「Dam Maps」日本の全ダムが地図にプロットされている (http://dammaps.jp/)



写真6 関電ブラックのゲートを装備している王滝川ダム(長野県・関西電力)

るのである。

また、近年ではこのダム行脚を後押しするアイテムも登場している。2007年7月から配布されている「ダムカード」だ。ダムカードは全国にある約300基のダムで配布されており、現地に行かなければ手に入ることができない。一人一枚のみの配布という決まりなので、現地を訪れた証として役立つ。また、デザインが統一されているのでコレクションに値するものとなっている。中には、ダムを見学することなく、ダムカードだけを目的にダムへ訪問する者もいるほどだ。

### ダムは働く構造物

ダム巡りをしているうちに、なぜダムが各所に存在しているのか気になってくる。「ダムはムダ」と言われているが、無駄なものが日本各地に点在している理由を知りたくなっていくのである。ここでふと我に返る。自分が飲んでいる水はどこから来ているのだろう、自分が使っている電気はどこで作られているのだろう。そして、この地に洪水がおこらないのはなぜなのだろうと。ここではじめて、ダムと自分の生活

が結びつくのである。

地図を開き、自宅付近にある河川を遡ってみると上流にダムを発見する。そのダムへ再度訪問し、パンフレットや案内板を眺めると、このダムの水を自分は飲んでいるということに気付く。治水面でも同様で、このダムの働きによって自宅は洪水から守られているという事実を知ることになる。電気も同様だ。このエリア帯のダムが行う水力発電によって、自宅に電気が届けられているのだと。この様な事実を知ると、ダムへ感謝の念を抱くようになる。

やがてはそのダムの細かな働きが気になってくる。

国土交通省が提供している「川の防災情報」という便利なウェブサイトがあり、ダムの放流量や流入量などダムの様子がリアルタイムで分かる。台風が来



写真7 ダムカード

るたびにそのサイトを開き、ダムの働きを見守るようになる。ダム愛好家たちはTwitterなどでその様子を実況中継し、「あのダムは貯水率があと数分で100%になってしまうが、頑張って!」などとダムに熱いエールをおくっている。そして、洪水調節が完了した時、ダム愛好家たちは「お疲れさま」とダムに温かい言葉をかけるのである。ここまで来ると、ダムは単に鑑賞するためのものという、ありふれた存在ではなくなり、その働きまでも魅力的に感じてくる。

ダムは良い仕事をこなしても、決して自慢はしない。当たり前のように水を供給し、当たり前のように洪水から人々を守っている。その事実を大々的に発表するわけでもない奥ゆかしいダム。洪水が起きてしまった時、マスコミにダムはコテンパンに叩かれるが、実際は幾多の洪水から人々を当たり前の様に守っているのである。この事実を知る人は少ない。ダム愛好家は、そんな寡黙なダムの味方になってあげたいと考えはじめるのである。

### 歴史に涙する

ダムの外観的魅力、そしてダムの内面的魅力を理解すると、今度はその歴史を知りたくなる。ダムの歴史は二種類あり、一つは、なぜここにダムが造られたのかという建設理由の歴史。もう一つは、ダムが完成してからの功績的な歴史である。

まずはダムが造られた歴史。地方のアースダムには、その歴史を著す石碑がよく設置されている。アースダムは土を盛っただけの単純な構造で、重機を用いなくても簡単に建設できてしまう昔ながらのダムである。かんがい用水確保を目的としたダムが多く、その歴史も古い。ダムの脇に設置されている石碑を眺めると、こんな風に書いてある。

「この地は水不足で農作物も育たず、毎年のように飢饉に見舞われていた。しかし、大正十年、この地の長老の功勞によりここに溜池が完成した。以降、この土地は肥沃となり飢饉に苦しむこともなくなった。」

この手のアースダムは、この様な理由で建設されたものが大多数である。ダムが村を飢饉から救っている。ダム一基一基に、その地の歴史と切っても切り離せない歴史があるのだ。

一方、ダム建設後の歴史も感慨深いものがある。

川の防災情報

ダム諸量一覧表 (関東地方)

観測時刻: 2013/07/19 24:00

ダム名	管理区分	区域平均降雨量 (mm)	貯水率 (%)	放流量 (m³/s)	貯水量 (10³m³)	貯水率 (貯水容量)	過去7日平均貯水率 (%)
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	282.08	9.50	0.00	188412	90.0
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	192.23	-	2.08	368	75.0
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	975.84	18.41	0.00	67629	90.5
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	605.64	0.50	0.50	58960	77.6
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	594.00	16.05	1.51	28311	88.0
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	425.54	11.06	0.28	10519	14.6
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	637.49	17.45	10.28	13932	43.7
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	955.21	16.59	9.27	14927	70.2
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	546.48	23.60	18.50	1259	8.5
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	450.00	-	-	2062	28.2
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	523.53	2.00	0.00	8796	44.0
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	621	0.00	0.00	0	0.0
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	830.00	18.25	0.00	46674	40.4
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	670.76	15.56	0.00	54302	64.0
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	272.78	0.32	0.32	4979	60.6
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	448.01	0.30	0.30	43925	81.1
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	355.42	1.21	1.21	28198	93.2
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	527.82	1.49	1.49	25704	44.4
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	450	1.74	1.74	28141	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	365.68	3.21	1.80	6152	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	80.15	0.80	0.80	-	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	1119.84	0.28	0.28	6192	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	42.41	0.27	0.24	350	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	370.82	0.06	0.10	2172	23.5
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	282.80	0.23	0.16	5919	76.7
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	241.84	0.23	0.51	3546	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	707.76	0.22	1.36	5048	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	520.53	0.30	0.30	780	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	494.22	0.82	0.84	1121	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	466.60	0.03	-	2746	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	676.82	0.06	0.03	48	-
宮ヶ瀬ダム	国営	0.0	325.78	0.04	0.04	239	-

図2 主要ダムのリアルタイム情報が提供されている「川の防災情報」(http://www.river.go.jp/)



写真8 一ノ沢堰と石碑(千葉県・土地改良区)

2002年10月、京都府にある大野ダムに台風23号が襲ってきた。雨で大野ダムがある由良川流域の舞鶴市では堤防が決壊、未曾有の災害となった。この台風はたちが悪く、2回の雨量ピークがあった。1回目のピークで大野ダムは満水状態。2回目のピーク時には、サーチャージ水位というダムの限界水位に達する勢いだった。この様な状態になるとダムは流入量と放流量を等しくし、これ以上ダムに水を貯めない操作に入る。しかしこのとき、ツアー客37人を乗せた観光バスが下流で立ち往生しているとの一報が入った。増水した河川に阻まれバスは屋根あたりまで水没、ツアー客は屋根に這い上がり救助を求めている。満水状態でこれ以上放流量を絞れないダム。しかしここでダムは放流量を絞り、ツアー客の命を救ったのだ。ダムから水が溢れてしまうため通常では考えられない操作だが、人命救助のためにルールを曲げた操作を行った。

ダムが人々の役に立っている事例を発見し、共感するのもダムの醍醐味だろう。表向きはただの大きなコンクリートの塊だが、私たちの知らない所でダムは大活躍しているのである。この様な話を聞き、そして調べ、より深くダムの魅力に填ってゆくのである。